

モスクワと新宿の違い

片 桐 敏 夫

落語に登場するハッつぁん、熊さんは、長屋住いの楽道家です。お祭りさわぎが大好きで、明日のことは気にしません。

われわれの仲間たちも、彼らに似たところがあります。ヒコーキのこととなると、まるで少年みたいに騒ぐが、その割には世間の事情に暗いのです。

もっとも、40歳を超えた年輩者には非行少年の気味があり、若手の方には飛行少年の趣があるという傾向は、スコシ感じられますが――。

しかし、東に「乗る、見る」という話があれば、よだれをたらしてスッ飛んで行き、西にスパッドS-VII戦闘機の残骸が見つかったと聞けば、顔面蒼白となって山坂を駆け登るといったところは、老若を問いません、

ところで今から5年ほど前に、この協会設立の話が出たころ、資金かせぎに考えたことは、

「露都モスクワに日本食堂を開設して資金を作ろう」

ということでした。

なぜモスクワか、といえば、当時あの広大な国、ソビエト社会主義共和国連邦には、日本食堂が一軒もなかったからです。（大きな中華食堂は一軒あった。）

土地建物は国有、人はぜんぶ国家公務員という国ですから、政府の認可と協力が得られ、利益折半という形ならば、他の企業と同様に食堂経営も可能だろうとの理窟でした。

われわれは、ソ連政府に宛てたロシア語の手紙を何回か出しました。店内改装の構想のなかで、装飾用の孟宗竹、カウンター用の桧材、座敷（3畳）用のタタミなどの輸送方法を調べ見積りを立てました。

彼の国には、ウクライナ米といって、わがコシヒカリ顔負けの極上美味の米があります。肉や魚類はソ連各地からの鉄道便で仕入れ可能、味噌・醤油・豆腐・沢庵漬・海苔・納豆の類いは日本からの空輸で仕入れ可能。献立てはスキヤキとにぎり鮨でゆこうと決めました。

われわれは、もう事業に成功したような心持ちになって、モスクワでの各人の役割りプランを着に、新宿の飲み屋でメートルを上げたものです。5年間で軌道に乗ったら営業権利を譲って、協会

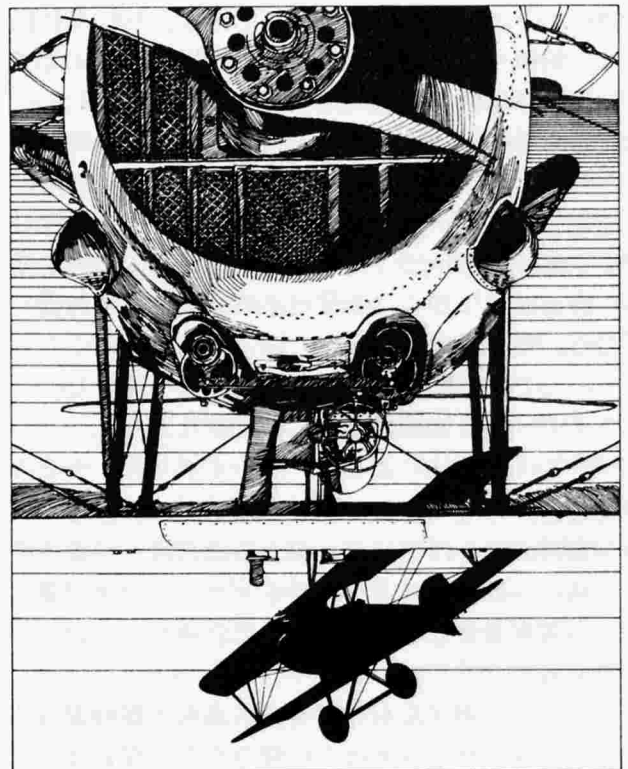
の資金にあてようとも話し合いました。

しかし待てど暮らせど、ソ連からの返事は来ず、この気球は2年後にしぼんでしまったのです。社会主義国相手の交渉ごとは、辛抱強くマメにやらなければならないことを知りました。そのためには持久資金がいる。その資金は日本で飲み屋でも開いて稼がねば……となると、これはもうベトナム戦争のような泥沼に踏み込む恐れがある、と判断し、潔く撤退しようと、また一杯やりました。

それから更に1年経ったある日の新聞紙上で、ソ連と日本交通公社の合弁企業「日本食堂」がモスクワに開店し繁昌しているのを知りました。われわれは、例の企画が盗まれたに違いないと信じています。新宿の飲み屋が店内を改装したのも、この頃です。その資金はわれわれの飲み代だろうとも信じているのです。

これはホンの一例で、アイディアは次つぎに湧き出て、いくつもの気球が膨らむのですが、浮揚したのは、年に数件でしょうか。

そんなわけで、この協会は、まだ自身の事務所もないのです。でも、借金もないし、他人さまにも迷惑はかけていません。（それは疑わしい、との声）。誰も思い付かなかった仕事を見付けて、なんとかこなしてゆけば「そのうち何とかなるだろう」という気持ちは、皆さん持っているようです。先が楽しみです。



小池繁夫 画